北新地

60th

Anniversary Book

私の北新地物語

北新地社交料飲協会

60周年記念

60周年記念冊子 ー私の北新地物語ー

北新地の灯よ、いつまでも。

「東の銀座」と並び称される西日本一の高級歓楽街――大阪「北新地」。
この地をこよなく愛するクラブやラウンジといった社交界のママやホステスさん達によって、永年にわたり培い、受け継がれてきた「おもてなしの極意」が、北新地ファンの心をつかんで離さないと言っても過言ではないでしょう。
将来どのような時代の変化が起ころうとも、この北新地イズム＝おもてなしが失われない限り、北新地の未来は輝き続けることでしょう。
この「私の北新地物語」をいつもバッグに入れ、折々みて取り出しては、心得ていたいこと、忘れていることを思い出しましょう。

挨拶

北新地社交料飲協会　理事長
60周年大会委員長
長瀧 敏郎

北新地社交料飲協会（ＫＲＫ）は、昭和37年に天満バー組合として発足して以来、今年で60周年を迎えることが出来ました。現在は厚生労働省の認可団体で大阪府社交飲食業生活衛生同業組合（ＯＳＲ）の下部組織として独立運営を行い、会員数は令和４年４月末で５００軒を超え、大阪府下では最大規模を誇るまでに成長を続けてまいりました。

本年60周年を迎えるにあたり、記念活動の一つとして、いつでも気軽に読み返していただける冊子「私の北新地物語」を作成する運びとなりました。

様々な方々の想いや思い出、教訓等々、読んでいて飽きない内容となっておりますので是非ご一読下さい。

これからも北新地社交料飲協会は、日本一居心地の良い街を目指し邁進して参りますので、皆様のより一層のご賛同、ご協力等をお願い申し上げます。

目次

1 挨拶　理事長　長瀧 敏郎
3 新ホステス心得 パートⅠ 仕事の心得
8 与代目 桂春團治氏 スペシャルインタビュー
12 粋なクラブのご利用方法　副会長　山名 和枝
14 当協会ママさんの思い出
20 上質な社交場でお客様との日々　副理事長　小阪 則子
22 四代目 中村鴈治郎氏 スペシャルインタビュー
26 新ホステス心得 パートⅡ 接客の心得
32 粋なＢＡＲのご利用方法　会長　東司丘 興一
34 お客様の北新地の思い
36 ＭＢＳ毎日放送アナウンサー 上泉雄一氏
42 ホステス・お客様あるある
44 ドレスコード一考
45 北新地発 数々の語源
46 北新地社交料飲協会（ＫＲＫ）ＨＩＳＴＯＲＹ
48 あとがき　副理事長　藤田 一彦

新ホステス心得 パートⅠ

仕事の心得

人はなぜ仕事をするのでしょうか？
生きる糧を得る手段として…、
自分の可能性を見つけるため…、
自分の目標達成のため…などなど、
その理由は人それぞれ。
しかし、同じ仕事をするなら、
それが生きがい、
やりがいにつながるものである方が、
あなたの人生を豊かに、
実りあるものにしてくれることは
間違いないでしょう。

■接客のプロフェッショナル

人生は想った通りになる。
想った通りにならないのは、
まだ想い方が足りないからだ。

プロと言われる人は、
誰よりも豊富な知識と経験を持つ。
しかも、それは与えられたものではなく、
自分の努力で獲得したものである。

プロは、何よりもその仕事が好きである。
しかし、好きがゆえに苦しみも倍加する。
そして、その苦しみを乗り越え、
向上し続けることに限りない生きがいを
感じるものだ。

プロは、言い訳をしない人だ。
言い訳とは、責任を自分以外の原因に
転嫁させることだ。

プロとは、どのように仕事をしたか
ではなく、どのような仕事をしたかによって
評価される。

プロとは、常に現状に満足せず
自己革新を図る人である。
だから、3カ月経って何の変化もなければ、
すでに仕事人とは呼べない。

■プロフェッショナルの哲学

プロは、ひたすら基本原則を
繰り返す。創造とは、繰り返しの中から
生まれることを知っているからだ。

マンネリは、自分で脱する他に方法が
ないことをプロは知っている。
そして、マンネリは自分の甘えから
生まれることも知っている。

プロは、どんな些細なことにも
常に全力を奮って立ち向かう。

プロは、最大の敵が自分自身で
あることを知っている。

プロは、常に新しい知識を
得ることに貪欲である。

プロには休息がない。
しかし、ゆとりは十分にある。

プロでも過去は変えられない。
けれども、自分と未来は変えられる。

■プロフェッショナルへの条件

人よりも多くの時間を仕事のために使う。
時間は誰にも平等に与えられ、そして
最も貴重な、お金では買えない資源である。

説得力を身に付けよ。説得の第一歩は
他人の話を真剣に、一生懸命に聴くこと
から始まる。

新聞やニュースをよく読め。そこには
一人前になりたい人に必要な99％の知識と
話題が、そして、考えるヒントがいっぱいある。

誰よりも豊富な情報を自分の力で集めよ。
アンテナを張り巡らせば情報が入ってくる。

悩むより、まず体を動かせ。
じっとしていては妄想ばかりで、
智恵も出てこない。

身銭を切れ。自分の向上のためには
惜しみなく投資せよ。形ある物は
いつか無くなるが、身に付いた智恵は
いつまでも残る。

具体的な目標の人物を身近なところで
見つけよ。そして、その人に追いつき、
追い越す努力をせよ。追い越したら、
さらに高い目標となる人物を目指せ。

一人前になろうと思うなら、少なくとも
3年間は全力投球してみよ。それでも
ダメだったら、そこで初めて諦めよ。
それまでは決してわき見をするな。

■アマチュア

経験の浅い人は、マイナス状況に陥ると
それに輪をかけてマイナスにしてしまう。
マイナスをプラスに変えることの
できる人を、プロという。

一般人は他人の評価に左右されがちだ。
プロは他人の意見は聞くが、
自分で価値判断を下す。

経験の浅い人は、これがあるから
できないと思う。一方プロは、
これを解決すればできると考える。

素人の範囲では、
どんなに上手くできても、
それは模倣に過ぎない。
独創性がなければ一人前とは言えない。

経験の浅い人は、変化が生じた時
ダメだと思う。プロは、変化が
生じた時チャンスだととらえる。

素人は、いつもやり直しが
できると思う。
プロは、いつもこれが最後だと
〝一期一会〟の精神で臨む。

経験の浅い人は仕事以外に生きがいを持つ。
プロは、仕事そのものに生きがいを持つ
のである。

与代目 桂春團治氏

スペシャルインタビュー

落語しか知らない男に 世間を教えてくれた北新地

〈略歴〉
与代目 桂 春團治
生年月日　1948年(昭和23年)7月20日
本　　名　山城　彰(やましろ　あきら)
襲 名 歴
桂 春章(1965~1968年)
与代目・桂 春之助(1968~1993年)
桂 春之輔(1993~2018年)
与代目・桂 春團治(2018年~)
初 舞 台
1968年(新世界新花月)

♫酒も呑めなきゃ 女も抱けぬ そんなど阿呆は死になされ♫…などと唄にも詠われ、その破天荒な生き様までもが多くの人を魅了した初代・桂 春團治。稀代の名跡を受け継いだ与代目が、冷めることのない〝北新地 愛〟を熱く語ってくださいました。

私は高校卒業と同時に三代目・桂春團治の内弟子となり、桂 春章の名前をいただきました。北新地へは昭和44~45年頃に、三代目師匠のご贔屓さんに連れてきてもらったのが初めてでした。お店の名前は忘れましたが、高級クラブだったかと思います。その時に言われたのが、「将来大きくなったら、このようなお店に出入りができるような存在にならなぁ、あかんで!」と。そしてご祝儀までいただいたことを今でも覚えてますわ。高校卒業と同時にすぐ内弟子になりましたから、新聞配達や牛乳配達位のアルバイトしかしたことのない、全くの世間知らずでしたから、北新地がどのようなところかなんて想像すらできませんでした。

その後、春之助時代にはテレビに出してもらえるようになり、顔も少しずつ売れてくると、ご贔屓筋に新地の色んなお店に連れて行ってもらいました。そのお陰で名前と顔を覚えてもらうことができました。厚かましくも「新地で俺を知らん店はもぐりや!」なんて豪語してましたわ。甲斐性なしで、自分のお金で行ってないくせにね(笑い)。

本当に多くの人に可愛がってもらいました。この商売ならではの役得ですなぁ。お店のママも出世払いのような雰囲気で、「早う、えろうなりや」と…。新地に育ててもらったという想いは強いですね。この街(北新地)は、楽しい思い出いっぱいのありがたい所です。

落語以外の世間の常識とかマナー、ルール等を教えてくれたのも北新地でした。ある店にご贔屓筋とタレントの川崎敬三さんとで入ったんですが、たまたま別のテーブルに顔見知りの方がおられ、挨拶がてら席に座り水割りを一杯ご馳走になったんです。その光景を見ていた川崎さんが、戻ってきた私にえらく不機嫌な顔で「大阪の芸人さんは、そんなことをするんだ」と言われました。会釈程度ならいいが、水割りをご馳走になるのは今日のご贔屓さんに失礼だ、というのです。確かに言われてみればそうですね。

もう一つの話は、お客さんと同伴した女性が座ったカウンター席の隣に、たまたま馴染みの男性が入ってこられタバコを取り出されたので、彼女が火を点けたそうです。すると同伴していたお客さんが彼女をすごく叱責したと…。彼女は自分がなぜ怒られたのか、理由が分らずキョトンとした状態だったそうです。

そりゃそうですわな。お客さんに連れて行ってもらってるお店で、いくら馴染みのお客さんと出会ったからといって、その人にサービスをするのはお門違いです。私が川崎さんに怒られたのと同じですわ。

東京の銀座と大阪の北新地はよく比較されがちですが、〝匂い〟が違いますな。大阪の街の匂いが北新地にはあります。東京の古今亭志ん朝（三代目）さんが、「大阪に来るとほっとするんだよ。『お帰り…』と言ってくれているようで、大阪弁に和むんだよ」と、よく言われてました。ただ、その後に一言、「何だよ、近頃の大阪は！」が必ず付いてましたが…。大阪弁の温もりや疲れた身体を優しく包み込んでくれる人情深さが薄れていくのを危惧されていたんでしょうね。

北新地はいつまでも「憧れの場所」であってほしい。「新地にいくぞぉ！」と誘われた時に、服装に気を配り、好きな女性を口説くような一種の緊張感が湧いてくる、そんな気持ちにさせてくれる存在であり続けてほしいですな。これにはお客さんとお店との共同作業が必要なことは言うまでもありませんがね。

粋なクラブのご利用方法

北新地社交料飲協会　副会長
山名 和枝

きっかけは昭和34年（1959年）の暮。まさか生涯の仕事になるなんて夢にも思わず、ラテンの神様「トリオロスパンチョス」のショーを、タダで聴きたくて入店したのがナイトクラブアローでした。アローの隣りには料亭「北大和」があり、宴会後の流れで来店されるお客様の凄いこと。アローには北野タダオ率いる十数名のバンドに、専属歌手にはアイジョージ、坂本スミ子さんが…。バックバンドはサキソフォンの古谷充さんとそのグループと、それはそれは、今では想像もつかない煌びやかな世界でした。

ホステスは「夜の蝶」と言われ、あちらこちらから指名が掛かると、テーブルからテーブルへと美しく飛び舞う、まさに「蝶」そのものでした。反対に指名の掛からないホステスは、ひとつのテーブルに釘付けで、日給ポッキリという有様。売れっ子ホステスさんの華麗な動きに憧れたものでした。

当時お支払いはすべてツケ（後払い）で、勘定書を突き付けられることもなく、サインもない、いわゆる〝顔パス〟でした。「おいおい支払いは…？」と、お連れの方が訝りますが、顔パスは男のステータスでした。サインも求められず、颯爽と肩で風きる格好良さ。いつか俺も…と、高度成長の良き時代でした。

担当したホステスさんは、20日締めの「ツケ」を早くて月末、さらには翌月5日か10日、15日にと、その都度自前で集金にお伺いするのです。もちろん手ぶらでは行けません。どの会社の経理も集金日はお菓子の山で、これでは余程の売れっ子でなければ採算は取れません。挙句の果てには多額のツケを溜めたままドロンするお客様もおられ、泣かされたホステスさんも少なくなかったようです。

現在では、ほとんどのお客様が銀行振込かクレジットカードでのお支払いとなり、集金の手間も省けてどれほど有難いことか、感謝に堪えません。

北新地の経営者の皆様、ホステスの皆さん、お客様との昔日の良き思い出を改めて思い起し、心から感謝と御礼を申し上げましょう。

当協会ママさんの思い出

司

私は北新地という素晴らしい地で、独立して早や39年が過ぎてしまいました。

振り返ると日本が大きく経済成長し、新型コロナの発生により、休業や時短営業などの厳しい状況下に至るまで、沢山の経験をさせて頂きました。

その苦しい中を見守り、応援して下さる心の広い素晴らしいお客様が、北新地には数多くおられるからこそ、私共は営業を続けさせて頂き、耐えてこれたのでは…と思います。最近は、お客様もお食事まではお付き合い下さいますが、2次会、3次会はご辞退が多くなりました。

しかし、お客様との「触れ合い」「寄り添い」の大切さ、必要性をもう一度認識して、「おもてなし」の原点をお客様に気づいて頂く努力を、私共は考え、勉強することが必要ではないかと反省いたしております。

北新地で飲食して頂ける良さなどのPR活動を、皆様と共にアイデアを出し合い、努力していくことが出来たら…と、切に願っています。

ママーンのこ

私が新地に足を踏み入れたのは、今から53年前の21歳の時でした。結婚に失敗して、子供もいるので友達の勧めで働き始めました。

その頃の新地はビルは少なく、大きなお店が多く、勤めるクラブは平屋の一階にありました。店ではバンド演奏があり、フロアーでは紳士とドレス姿の女性が華麗に踊っていて、これが新地の社交場なのだと思いました。

新地本通を歩く人は、着物姿かドレス姿の紳士淑女しかいなかった。ここ何年か前からはジーンズ姿や、夏は短パンなどの人を見かける様になりましたが…。それに、低料金の焼き鳥屋が出来たり、回転寿司屋が出来たりと、驚きの連続です。

今では新地もビルが多くなり、1階から6階ぐらいまで小さなお店がたくさん入り、女の子達もアルバイトでしか働かないという有様です。昔はアルバイトなんて軽い気持ちで働く人は一人もいなくて、皆んな真剣でした。まさに隔世の感ありです。

開店前にはミーティングもあり、あれこれと厳しく指導されたものでした。やはり厳しく指導された事は、後々になって本当にためになっていると痛感しています。

これからも新地が少しでも昔の様になって欲しいと切に願います。

サロン君屋

昭和39年の東京オリンピック、万国博覧会、オイルショック、バブル期、阪神大震災、コロナ禍のすべてを北新地在籍中に体験!!　58年間の多くの出会いと別れを深く心に刻み、今も愛して止まない北新地の移り変わりを父から息子へ継がれ、若き起業家たちの頼もしさ！　北新地はまだ捨てたモノではない。ホステスさんも変わった。大学卒業後、社会人として上場企業に勤めていたが、北新地で社会勉強をと…。息子のようなお客様に、娘のようなスタッフに助けられて、78歳の今も第一線に立てる幸せを噛みしめる。

上通り 森口

当時60坪あった老舗クラブが、唯一出した求人に応募して私の北新地は始まりました。お酒の飲めない29歳、両親二人の子供付き。そのうえ、話し下手。四重苦の始まりながら、真面目ひと筋16年。ママになるまで育てて戴きました。子供の自立と共に独立。

藤田まことさんの店だったモンドを薦められ、美しい木目のクラシックな店内が好評で28年が過ぎました。特筆すべきは組合との事。還暦過ぎの出会いながら、善意に満ちた皆様との交流は今も私の宝物です。

クラブ山咲

北新地デビュー当時、右も左もわからぬ私に、品格あるこの街の諸先輩方や魅力的で博識あるお客様が、多くの事を教えてくださいました。

北新地の一番の素晴らしさは、掛け値なしに頑張っている人を素直に認め、良いものを正しく良いと評価するところにあると思います。

常に謙虚な心構えで、自身を育てていただいた感謝を込めて、前途ある後進とともに、北新地のあるべき姿を存続できるよう、精進して参りたいと思っております。

N・S

初めてお店に立ったのは20歳の時です。ひどく緊張していたことを覚えています。

何もできない状態から〝自分にできることは何か〟をひたすら追求して参りました。

お客様からは時に優しく、時に厳しく、ホステスとして、ママとして、どうあるべきかを教えて頂きました。コロナ禍の今、懸命に頑張っている女の子達の姿は、当時の私と重なるように感じております。

これからも、北新地のおもてなしの心が継承される事を願うばかりです。

Y・M

夜の社交場、最高級の街、北新地でお世話になって33年になります。30年前のバブルは弾けたものの、まだその余韻が残り街には活気がありました。

尊敬する諸先輩方々に、おもてなしの心得をお勉強させてもらい、素敵なお客様とのご縁も繋いで頂きました。私の人生、北新地には沢山の思い出と感謝しかございません。これからも、自分自身、愛と夢とロマンを抱いて、お客様に明日への希望と活力を感じて頂けるよう、日々、精進して参ります。

R・Y

きらびやかで賑やかで艶やかな、あの街には何があるのだろう、畏怖と共に憧れた。好奇心と若さとただの自信過剰な心意気で、なりたい自分を演じ切れる可能性を夢見た。百戦錬磨のお客様が、自分を必要とされるかどうか。一流のお客様に見合う心の品格が問われ、苦悩した。中途半端な自分に怒ってくれたママがいた。見捨てずにいてくれたお客様がいた。すべては「愛」でしかなかったと今では分る。生き残るには、信用を得るには、不器用であろうが生真面目こそが命。足るを知り、礼儀と節度。結局は人間性だと悟る。

Y・U

北新地で20年、「夜の商工会議所」と呼ばれるお店で8年お世話になり、その間に街の景色も随分変わりました。沢山のお客様とお顔を合わせてお話をする時間を頂きました。東の銀座と並び称される西の北新地。「ホステスが男性(お客様)を口説く街」と囁かれ、魅力的なお客様を目の当たりにし、憧れを抱きました。この街はこれからもそんな街であり続けて欲しいです。

先達の教えに学び、灯を絶やさぬよう励んで参ります。

N・I

20年前の秋、求人雑誌を片手に新地本通りで立ちすくんでいました。配達途中の酒屋さんに目的のビルを教えてもらい、何とか面接には間に合った……。そんな懐かしい思い出が蘇ります。今は携帯の位置情報で自分がどこにいるのかが分り、ストリートビューでビルの外観も分ります。メイクも動画で学べます。多様化する価値観や様々な情報に埋め尽くされる昨今、ホステスという職業への抵抗感は薄れ、アルバイト勤務の人も多くなりました。しかし、時代を経ても変わるべきでない姿を学び続けたいと思います。

上質な社交場でお客様との日々

北新地社交料飲協会　副理事長
小阪 則子

1978年、北新地の本通りに、庭のあるスタイリッシュでお洒落なビル、北リンデンビルが出来ました。お店を出すならこんな素敵なビルに構えたいと、その年の10月にカウンター4席とテーブル席4卓の小さなお店をオープンしました。当時は接待も盛んで、北新地も賑わっていた良き時代。黒塗りの車が行き交う粋な街、それが北新地でした。

仕事を終えて、どのお客様も食事の前にちょっと一杯…と、北新地の始まりはバーからだったと思います。バーはお酒の知識が豊富なバーテンダーの方が、色々な雑学を楽しみながら教えてくださる場所でした。

かつてあった「バーにむら」のマスターには、本当に勉強させて頂き、楽しい時間を共有できた大好きなお店でした。このようなバーからお客様は食事に行き、それから高級クラブに行くというスタイルだったと思います。

私はとにかく仕事が面白くて楽しくて、素敵で綺麗な女性たちが、本通りを歩いておられる姿を何度も振り返りながら見たものでした。でも、そのような綺麗な女性には太刀打ち出来ないので、私は会話しかないなと、話術の技を磨くのに専念しました。

高級クラブは、日頃お会いできない方々と同じ席で会話させて頂く、本当に贅沢な仕事場だと改めて感じます。またお客様も北新地に出入りできることがステイタスであり、特に一流の人達が集まる高級クラブでは事業欲も高まり、それが明日のエネルギーの源になっていたそうです。

クラブでは人が人を呼ぶ。一流クラブに出入りすることが、エリートの仲間入りをすることです。そうして、お客様がお客様を呼んだのです。北新地に学び、長く通う事で大きな価値を生み、上質な遊び場としての文化を育む…、そんな社交場(北新地)でありつづけることを願っています。

44年間、このような素敵な北新地で楽しいお店作りをさせていただきました。しかし今、新型コロナという自然の猛威に翻弄され、先行きの見えない世界が待ち受けていたとは、誰が想像したでしょうか。2年余り、あまりにもつらく、長くも短くもある月日を振り返りつつも、少しずつ活気を取り戻し、新たな一歩を踏み出し始めました。これからも古き良き精華を守りつつ、成長していきたいと思っております。

四代目 中村鴈治郎氏

スペシャルインタビュー

人が街を育て 街が店を育てる

〈略歴〉
4代目 中村鴈治郎(屋号：成駒家)
生年月日：1959年(昭和34年)2月6日
本　名……林　智太郎
襲名歴：初　代　中村　智太郎(1967年)
5代目　中村　翫雀　(1995年)
4代目　中村　鴈治郎(2015年)
父……4代目　坂田　藤十郎
母……扇　千景

先輩諸氏に北新地に連れて行ってもらったのは、22～23歳位だったでしょうか。当時は酒屋で買って飲めば安くつくのに、何倍もの高いお金を払ってまで人はなぜお店に飲みに行くのか、不思議に思いました。あれから45年。芸の世界はこれで100点と言えるものはなく、究めるゴールが見えない世界です。それだけに、舞台での落ち込みを翌日に持ち越さないためのストレス発散は不可欠で、お酒は大切なパートナーです。まぁ、毎日飲むための言い訳にしか聞こえませんでしょうが…(笑い)。高いお金を払ってでも飲むお酒に何があるのか？　その答えは、人と人との楽しい出会いを作り、疲れた身体を癒してエネルギーを補給してくれる活力剤であり、落ち込んだ時には励ましてくれる恋人のような効力をもたらしてくれる…。それはもうお金の大小で論じるものではないでしょう。

最近では接待も昔に比べれば少なくなったようですが、全国各地の名立たるお店には、経済界や企業経営者、有名人等々が多く集まり、まさに〝夜の社交場〟と言われる所以でもありました。人が集まる所には物が動き、街が育ち、人が育ち、お客様も育つ…と、色んな事が学べる社会勉強の場でもありました。人と人のつながり、人とお酒の関係はどうあるべきか。人の集まるお店（繁盛店）が醸し出す、〝匂い〟

のようなものを肌で感じることができたように思います。

「男の粋な飲み方は？」とよく聞かれますが、粋な飲み方はこうだと考えながら飲んだことはないですね。粋という言葉も大阪と東京では意味合いが変わってきます。東京ではイキ(粋)と読んで、見栄っ張りのやせ我慢的な意味合いに。大阪ではスイ(粋)と読んで、人生の機微に通じた人情家のニュアンスが…。武家社会（東京）と商人社会（大阪）の中で育まれた文化の違いでしょうか。人それぞれ自分のスタイルがありますから、そんなスタイルを受け入れてくれるお店であれば、私としては大変うれしいですね。

私は飲む時は大概一人です。周りの人に気を遣わず、気ままに飲みたいので…。知らないお店に飛び込むのも全く苦になりません。気に入らなければすぐに出るだけですからね。好きなお店は、少し抽象的かもしれませんが、何かしら「風情」や「人情」が感じられる、そんな雰囲気のあるお店を結果として選んでいるみたいです。情（なさけ）の「さけ」は、もうひとつのお酒だと思っています（笑い）。

音楽や映画、芸術、芸能などは空気のような存在で、普段その有難み（存在価値）を意識することはほとんどありません。しかし、無ければ日常の暮らしは途端に味気なくなり、精神的な豊かさや喜びを享受することもできません。人が生きる上で必要なのはコメやパンだけではない！　ということでしょうね。

〝遊び〟と言われるものを長い歳月をかけて、〝文化〟と呼ばれるものに熟成～昇華させていく…。そのようなものが人間社会にも必要なんですね。江戸時代のおよそ300年間、戦争のなかった国は日本だけと言っても過言ではありません。そのお陰で色んな分野で様々な文化が生まれ、花開き、現代にまで脈々と受け継がれてきました。このような文化と呼べるようなものが、お酒の世界にも存在するはずです。それを北新地から世の中にしっかりと発信してほしいですね。東京や名古屋、博多でも、そんな「遊びの文化」を受け継いでいるお店は少なくなってきたように感じます。しかし、北新地にはそのような文化を継承している（しようとする）お店は多くあり、将来にわたって守っていってほしいですね。

私が北新地を応援する理由も実はそこにあるのです。

新ホステス心得　パートⅡ

接客の心得

心身の疲れをリフレッシュするために、
明日への活力を補うために、
お酒と会話を楽しむために…
お客様が北新地に来られる目的は
まさに十人十色。
お客様の数だけお酒を楽しむ形があります。
しかし、接客の心得はただひとつ。
お客様の期待を裏切ることのない接客を
心がけることです。
接客のプロとして、〝おもてなしの心〟を
絶えず追求するあなたがいる限り、
北新地の灯はいつまでも
消えることはありません。

■美しさとは

「ホステス」とは、あなたに捧げられる冠である。
王冠となって燦然と輝くか、棘の冠となって
傷みを残すかは、あなた自身の心のなかにある。

身だしなみは華やかであること。
地味すぎて生活感がにじみ出るような
服装はさけるべきである。

美人には2種類ある。
黙っていると美人と、
おしゃべりすると美人というタイプだ。
ダンマリ美人は、3回で飽きられる。

性格が誠実・素直でないと、
本当の美人には見えない。
どんなに容姿が良くても
心の化粧を忘れずに。
眼の輝きだけは整形できない。
〝微笑み美人〟が本当の美人である。

神秘的で個性的な容貌は人を惹きつける。
少なくとも所作動作だけでも、
そのように振舞うべきである。

■おもてなしＡＢＣ

お客様の名前は一度で覚えること。
覚えたら3年間は忘れぬこと。覚える工夫は―
①繰り返し名前を言いながら話す。
②さりげなく名刺をいただく。
③覚えるまで名刺を仕舞わない。

好みのお酒や嫌いなおつまみは忘れないこと。
２度目の来店時にお酒の種類を
聞くようではダメ。

前回来られた時の話題と、
一緒に来られたお連れ様の名前を
覚えていること。

お客様の興味を示す話題に集中しましょう。
あなたの興味本位の話題にならぬよう
注意すること。

後から席についたホステスさんに、
お客様を紹介すること。紹介されたら
ヘルプでも必ず名前を覚えること。

お客様とお客様の関係を間違えぬこと。
間違えたら詫びても済まぬ場合が多い。
信頼を築くのには時間がかかるが、
怒らせるのは一瞬である。

会話で一番大事なことは、
話すことよりも聞くこと。
聞き上手こそ、接客上手になる
一番の早道である。

席を去る時には、お客様からいただいた
お酒のグラスを放置しないこと。
お客様はその1杯にもお金を払っている
ことを忘れないこと。

帰られるお客様に「あぁ、楽しかった。
もう一度近いうちに来よう」と、
思わせてこそ一人前。
最後の5分間が勝負だと心得よ。

■プロとしての資格

ホステスは、お金をもらっている
接客のプロであることを忘れないように。

お客様はあなたの友達ではない。
有名人が気安く話してくれたからといって、
あなたが有名人になった訳ではない。
勝手に友達呼ばわりしないこと。

店外でお客様と逢った場合、お客様から
声を掛けてこない限り、あなたから
声を掛けないこと。視線があったら
目礼だけでいい。特に家族連れの時は、
素知らぬ態度で通り過ぎよ。

営業外の時の服装・化粧で、一目見て
水商売と分かるようでは一人前ではない。
一流のホステスは、一般人と区別が
つかないものだ。

チヤホヤされるのは、〝若さ〟と
〝美しさ〟がなせる技。
それは10年続くものではない。

今の収入は、世間的には異常に高いもの
であることを忘れずに。
いつかは正常に戻る時が来る。
その時を覚悟しておくことが重要だ。

好意を見せても、嘘はつかぬこと。

■思いやりとは

お客様によって接客法を変えよ。
賑やかなことが好きな人、静かに話すのが
好きな人…。ワンパターンな接客では、
お客様に飽きられてしまう。

マニュアル化できるサービスは
接客のイロハ(原理原則)。
お客様のその日の状況に応じて、
柔軟に応対できるサービスこそ、
究極の思いやりである。

さりげないサービスこそ、
本当の思いやりです。あなたが望むことを
してあげることが一番だ。

【毎日口遊(くちずさ)みましょう】
(昔から伝えられてる言葉です)

女性の基本三ショウ
①衣装　②化粧　③微笑

営業心得9ケ条
①マメに　②よいしょに　③プレゼント
④気配り　⑤目配り　⑥思いやり
⑦勇気に　⑧行動　⑨テクニック

さあ　今日も頑張りましょう

粋なBARのご利用方法

北新地社交料飲協会 会長
東司丘 興一

カッコよくお酒が飲めるようになることは、「北新地」を上手に使いこなすための必須条件です。また酒の飲み方や酒の場のマナーを学ぶには「バー」を利用するのが近道です。それらは何度もバー通いを続けるうちに、自ずと習得されていくものなのです。

まずは臆さず怯まず、オーセンティックバーの重厚なドアを開け、カウンターに背筋を伸ばして座ることから始めましょう。カウンターに座るのは1人か2人、せめて3人まで。4人以上ならテーブルを選んで座るのがマナーです。カウンターの上にバッグや物などを置いてはいけません。荷物は必ず店の方の指示に従って置いてください。因みに男女ともオシャレな服装での来店を心掛けたいものです。

バーでの会話は静かに小声で行いましょう。多人数での来店も可能ですが、大声でワイワイガヤガヤ騒ぐことは厳禁です、ここが居酒屋との相違点となります。

バーではあくまでも品格ある大人の振る舞いが求められます。それが北新地全般に

通じる「大人の常識」です。

カクテルをはじめとするドリンク類を注文する時、知ったかぶりをせずにバーテンダーに尋ねましょう。目の前のバーテンダーが丁寧に教えてくれる筈です。乾杯をするならあくまで上品にすること。高価なグラスをカチカチ当て合うのはマナー違反、軽く会釈をしながら、グラスが当たらないように慎重に行うのが礼儀です。

お酒の量とペースには気を付けましょう。深酒、泥酔はダメ。逆に一杯だけで長居をするのもいけません。バーは酔っ払う処でもお喋り目的の喫茶店でもないのです。1時間ほどの滞在で3杯程度がカッコいいでしょう。またバーの梯子も結構ですが、次の店に酔いを持ち込まない配慮は必要です。

勘定の際、割り勘なら店を出てからが望ましく、レジでは1人がまとめて支払うのがスマートです。店内でゴチャゴチャ小銭を出し合うのは、見っともない行為と見なされます。

このように書いてくるとバーって面倒臭いところだなと、思われるかも知れませんが、慣れてくると簡単です。バーは、「北新地」で「モテる大人」になるには必要不可欠な通過点であり、将来きっと役立つ「学びの場」なのです。バーの扉を開けてカウンターに座ることから始めてください。バーを上手に活用して、あなたも「北新地」の一流店に相応しい「粋なお客様」になってください。

お客様の北新地の思い

K・Kさん

北新地に来ないと、生活のバランスが崩れてしまう。

私が初めて北新地に来たのは大学生の時ですから、もう半世紀に及ぶお付き合いになります。その間、ほぼ毎日と言っていい位通いましたねぇ。まぁよく飽きもしないで…と、自分でも感心するほどですから、他人様にはどう映っているのか、聞くのが怖い気がしますわ（笑い）。家→仕事→北新地→家→仕事→北新地と、毎日の暮らしの一部に北新地は組み込まれているようなものです。言い換えれば、北新地にはそれだけの魅力がある、ということです。一人の男を50年間、飽きさせずに通わせる何かが！

その答えを見つけるために、今もせっせと足を運んでいるのかもしれませんね。

これだけお世話になった北新地に何か恩返しができないかと思い、私の仕事先の協力を得て、北新地の協会員やお店の従業員の皆さんに、特別価格で人間ドックを受診してもらえるプランを提案しました。私自身、何年か前に大病を患い、またこうしてお酒を楽しく飲めるのも健康なればこそだと痛感しましたから…。私が北新地でこれからも楽しむために、まずは新地の皆さんに健康診断をしてもらおうという訳です。

T・Nさん

安心して飲める、楽しめる街。この一体感が魅力のひとつ。

私もコアな北新地ファンの一人です。20代前半からの新地詣で、あれこれ50年以上が過ぎてしまいました。会社の連中や仕事関係の人と飲むのは余りないですね。どうしても気を遣ったり、遣われたり…と、自由気ままに飲むことができませんから。一人で飲むのがいいですね。行きたいお店に行き、帰りたいときに帰るといったマイペースが一番です。

安心して飲める、というのが北新地の最大の魅力でしょうか。それに毎日でも、飽きずに楽しませてくれるお店が多い、というのも50年間通い続けた理由のひとつですね。

粋な飲み方は人それぞれのパターンがあるかと思いますが、私の場合、その場の雰囲気を壊さずにお酒や会話が弾み、楽しめれば、それが何よりだと思います。時々ホステスさんに説教じみたことを言ってるお客さんを見かけることがありますが、あれはいただけませんね。ホステスさんは接客のプロですから、気分で怒られているのか、アドバイスなのかは分かります。アドバイスなら本人にこっそり耳打ちするのが効果的ですからね。

MBS毎日放送
アナウンサー
上泉雄一氏

後輩アナウンサーの教材のひとつとして

〈略歴〉
生年月日　1969年2月9日
入社年　1992年
出身地　兵庫県
出身大学　早稲田大学
［担当番組］
上泉雄一のええなぁ！（月～金）
成毛眞のラジオ（月）

毎年節分に行われる「堂島薬師堂 節分お水汲み祭り」や「ようこそ！ 北新地へパーティー」の司会を担当させていただいております、MBSアナウンサーの上泉雄一です。

私が毎日放送に入社したのは、30年前のちょうどバブルがはじけた1992年（平成4年）で、本社は梅田・茶屋町に移ったばかりの頃。それまでテレビ・ラジオは「千里丘放送センター」から放送し、営業局などの本社機能は堂島の毎日大阪会館にありました。その意味では、北新地はMBSとしてもたいへんゆかりのある街です。

入社当時、先輩アナに飲みに連れて行ってもらった時には、さらにその先輩の北新地での背びれや尾びれがついた「武勇伝」をよく聞かされたものです。そこに時を経て、さらにひと盛り加えられて現在まで語り継がれておりますが、今となっては確かめようがございません（苦笑）。華やかな時代だったとはいえ、それほどに北新地は「大人の社交場」としても魅力的な響きがある街です。

今でも「昨日、新地で飲んでまして～」なんて話をしますと、「あら、うわちゃん、ちょっとええ話でもあるんかいな？ 羽振りよろしいなぁ…」との声が聞こえてきます。「いえいえ、ちょっと軽くバーで飲んだだけですねん」「またまたぁ！」

みなさまご承知のとおり、決してホステスさんと楽しく飲む、それだけの街ではないことも北新地の魅力です。

お水汲み祭りなどを通して、ＫＲＫの皆様とご縁ができていろんなお店を紹介していただきました。飲食店はもちろん、飲み屋さんも超高級なクラブだけでなく、私のようなサラリーマンでも気軽に行けるバーも多く、それぞれのお店がとても個性的なマスターやママのもとで、それぞれのご予算でそれぞれのスタンスで楽しめる街であることが分かりました。

またカラオケを楽しむも良し、生演奏で歌うも良し、ショーやマジックなどのエンターテインメントを楽しむも良しなど、ほんとうに様々な顔を持つ街です。もちろん、ここ一番の接待場所としての社交場の地位は、何ら変わるところではありません。

そんな場所に同席させていただいた時に、お酒の場でのお客としてのふるまい方や、たしなみを多くのカッコいい方々に教えていただきました。またそこで、席についてくださるホステスの皆様に儚い夢を見させていただきました。そのホステスさんの「おもてなし」は、私も人と接するお仕事をさせていただくものとして大変勉強になっております。

以前、発刊された「ホステス心得帖」復刻版。最近は、後輩アナウンサーの研修だけでなく、企業様の「話し方」研修などもさせていただいておりますが、この「ホステス心得帖」は、教材として多くのところで活用させていただいています。

特に私自身がハッとさせられたのは、「座持ちのテクニック」です。『お客様の聞き手に回れ。聞いている証拠に相槌を打て。お客様の顔を見て話を聞け。脇見ばかりするな。お客様は落ち着けない』。トーク番組やインタビュー時などでは、とても大事な要素です。

『もっともダメなホステスは、お客様の話の腰を折って、尋ねられてもいないのに自分のことばかりトウトウと喋りまくるホステスである。雄弁なホステスより、寡黙にして真剣に聞いてくれるホステスをお客様は好む。お客様の話は、顔を正面に向けて聞くのが良い』。

この「ホステス」というところを、私は「アナウンサー」という言葉に置き換えて伝えています。

放送において、聞かれもしないのに自分の話を延々と続けるアナウンサーより、寡黙にして話を「引き出す」のが我々の役割だ、ということを一流のお店のホステスさんに身をもって教えていただきました。

最近は「話し方」というより、「聞く力」をどうすれば身に着けることができるのか、というご質問をいただきます。まさにそれは、一流の接客業の方々の中に答えがあります。

もちろん、高級なクラブでなくても、心地よく話を引き出してくれるマスターやママのいるバー、またタイミングを見て、そっとしておいてくれるお店。知らないうちに、そのお店の雰囲気の中で遊ばせてもらっているんでしょうね。

北新地にはその空気を絶妙に読んでくれる方が多いからこそ、その時の気分に応じて「今日はあの店に行こう」とついつい足が向いてしまうのです。

去年の春、最初の緊急事態宣言が発令され、繁華街の現状を取材するためにこの街を訪れた時、灯りが消え、真っ暗になった夜の北新地を目の当たりにしました。その現実に大げさではなく喪失感と絶望感に襲われました。ということは私以上に、経営者の皆様はそれどころではなかったかと存じます。

この原稿を書いている（令和3年）11月下旬現在、北新地には少しずつ活気が戻ってきました。コロナ禍で家呑みしかできない時期が増え、その状況に慣れてしまうと、世の中が少し落ち着いて緊急事態が明けて規制が緩和されたなかでもすぐには客足が戻らず、「別に外で飲まなくても…」と思うお客さんが多くなってきた、とお店の経営者の方からお聞きしました。

かたや、お客様の「まだこの状況でおおっぴらに北新地に向かうのは」という気持

ちも、ひとりの飲み客としてよく分かります。この記念冊子が発行された時には、世の中の状況がどうなっているかは、見当がつきません。

これまで、我々は、新年会や忘年会、歓迎会に送別会と、何かと理由を付けては街に繰り出しお酒を飲んで、明日への活力にすると同時に季節や時の流れを感じました。「年末だからタクシーがつかまらない」と愚痴が言えたのも、実は幸せの証だったのかもしれません。

きっと、そんな普通の日常も間もなくやってくると信じています。

そして、さんざん飲んで翌日エラいことになり、「もう二度と酒は飲まない！」と心に固く誓ったその日の夕方、昨日のことはどこへやら、華やかな灯りと共に「ようこそ！北新地へ」と出迎えてくれるこの街に、またふらふらと性懲りもなく出向くことでしょう。その時はどうぞ、お手柔らかにお迎えください。

ホステス・お客様ある ある

◆水商売への印象はどうでしたか？

「黒革の手帖」や「お水の花道」を観ていたので水商売への印象はギラギラしている、怖いお姉様がいらっしゃるイメージでしたが、そんなことはありませんでした。

ママさんもホステスさんも〝お客様に楽しんで頂く〟ことを何より大切にされていました。水商売だからと、世間から非難されることも多い職業ですが、普段会えないような方と知り合いになれ、貴重な体験ができる職業だと思います。

◆〝飲む〟か〝喋る〟か〝色気〟か、どう努力すれば良いですか？

お酒が飲めない、人生がまだ短くて引き出しも少ない、そのうえ色気も無し…。

そんな私を助けてくれたのが〝芸〟でした。お席で歌い踊っていたら色んなお客様から呼んでもらえるようになり、沢山のお客様と知り合うことができました。〝芸は身を助く〟とは、まさにこういうことだと思います。

◆ゴルフは始めたほうが良いのでしょうか？

ゴルフを始めなさいとお姉様から言われ、ゴルフを始めた頃はこのスポーツの何が楽しいのか全く解りませんでした。でも、朝早くから夕方まで約8時間も一緒に過ごす中で、お客様の性格や次回のご来店予定など重要なことを知る機会となり、1日かけて同じ目標（ピンの事）へ向かうことで心の距離が近づくことを知りました。今や私にとってゴルフは仕事の一部であり、またストレス解消も兼ねた欠かせないスポーツです。

◆水商売って簡単に見えているのでしょうか？

「笑って酒飲んで、楽な仕事やな」ってお客様に言われたことがありますが、もちろんそんなことはありません。ホステスも人間ですので嫌な顔も隠しきれないですし、作り笑いもします。そして当然私たちにも好みがあります。どんな男性がモテるのか？　良い男の秘訣ってなんだろう？　財力のある人？　北新地で仕事をしていると、お金が溢れている方をたくさんお見かけします。では、お金持ちがモテるのか？　そうではありません。結局のところ性格です。冒頭にお話したように、「水商売って楽な仕事やな」なんてこと言う方を、私は好きになれません。

「水商売も大変な仕事やな。お酒飲みながら、相手に気を遣うんやから」。こんな風に言われたら、私はその〝思いやり〟に感動し、その方を好きになるかもしれません。

ドレスコード一考

北新地のクラブに行くにはスーツかジャケット、ネクタイ着用というまことしやかなルールのようなものがあります。大人の社交場だから、身なりを整えてという当然のエチケットやマナー。欧州では、オペラやコンサートには紳士淑女が着飾っていきます。いわゆるよそ行きの感覚です。北新地はそんな場所です。

しかし昨今随分とラフな格好の方もいらっしゃいます。ルーズで無頓着な格好は、雰囲気を壊すことにもなりますし、お店の資質を問われる事にもなりかねません。

しかしどうでしょう？　なかにはジャケットやネクタイがなくても、ハイファッションで極め込んでる方もいらっしゃいます。お店側にとってもその目利きの知識や感性は、良いおもてなしをするために必要です。それこそ欧州の社交場は時代と共に多種多様に進んでいます。

スーツでバシッと決めていこう！　ハイセンスでファッショナブルに行こう！いずれもその思い、気持ち、気合い、感性が大事でステキです。気持ちが変われば服装が変わる。服装が変われば振る舞いが変わる。振る舞いが変われば飲み様が変わる。飲み様が変われば…？そこからはお楽しみ、あなた次第です。さあ！今夜もめかし込んで北新地へ出かけましょう！

◆それぞれの業態内容を一言で言うとすれば

- **クラブ**
  一人のお客様に一人のホステスさんが付き接客するお店。
- **ラウンジ**
  一組のお客様に一人以上のホステスさんが付き接客するお店。
- **スナック**
  カウンター越しに接客するお店。
- **バー**
  カクテルを提供できるお店。

◆北新地発　クラブの語源

昭和35年頃、茨木カンツリー倶楽部の会員たちで“19番ホール”として北新地で遊べる店をつくる相談が牡丹俊夫氏にありクラブぼたんとして営業を始めた。

◆北新地発　ラウンジの語源

昭和54年夏、クラブＤＡＮＡを経営していた今井利充氏が、クラブとスナックの中間業態として店名をバーラウンジＤＡＮＡとしてホステスには全員、白のブラウス・蝶ネクタイ・黒のロングスカートを着用させ営業を始めた。

◆酒場のスナックとは、もともとどういう意味ですか？

スナックはもともと「軽い食事」の意味です。酒場のスナックはスナックバーの略で、軽い食事も出せるバーのこと。東京オリンピック開催の１９６４年に、お酒を取り扱うお店が深夜営業するためにスナックを提供するお店という扱いが広まりました。

◆コンパニオンとはどういう意味ですか？

英語で「話し相手」の意味。それが日本で水商売の接待係を意味するようになりました。ホステスとの違いは、ホステスは顧客管理なども行うプロといえますが、コンパニオンは接客のみのアルバイト的なものといえます。

〈北新地社交料飲協会（KRK）HISTORY〉

1962年（昭和37年）親睦団体「天満バー組合」を設立。組合長に相生昌光氏就任。
1967年（昭和42年）「大阪府社交飲食業同業組合」を結成。支部として加わる。
1968年（昭和43年）「北新地バー組合」に改称。組合長に相生昌光氏、理事長に岡田一男氏就任。
1992年（平成4年）「北新地料飲協会」に改称。会長に岡田一男氏、理事長に岸本辰三氏就任。
1997年（平成9年）JR東西線開通。北新地駅開設される。
2000年（平成12年）理事長に河口貴賦氏就任。
2001年（平成13年）「北新地社交料飲協会」に改称。
2002年（平成14年）第1回「ようこそ！北新地へパーティー」を開催。
2003年（平成15年）北新地本通りの美装化工事完成。文化銘板を設置。
2004年（平成16年）北新地おもてなしMAPを発行。
2005年（平成17年）第1回堂島薬師堂節分お水汲み祭りを開催。
青年部誕生。顧問に藤田恭生氏、部長に長瀧敏郎氏就任。
中之島ガーデンブリッジ橋洗いに参加。
御堂筋パレードに参加。
第1回わが北新地サントリー・オーナーズカスクを発売。

2006年（平成18年）会報誌「わが北新地」をリニューアル発刊。
2007年（平成19年）サイクルサポート活動団体認定証収得。
2008年（平成20年）第1回会員交流会が開催される。
2009年（平成21年）初代北新地クイーン決定。
堂島・北新地えびす詣招福行列、70年ぶりに復活する。
2010年（平成22年）天神祭北新地巡行を開催。
北新地防犯パレードを開催。
理事長に東司丘興一氏就任。
部長会開催。
2011年（平成23年）北新地エリア自転車放置禁止区域に指定。
2012年（平成24年）創立50周年記念誌発行。
2014年（平成26年）創立50周年記念総会を有馬温泉「中の坊瑞苑」にて開催。
2015年（平成27年）「ようこそ！北新地へ パーティー」スペシャルディナーショーを開催。
2020年（令和2年）36年ぶりに「ホステス心得帖」復刻版を発行。
2022年（令和4年）北新地本通り美装化工事完成。
文化銘板を一部リニューアルする。
創立60周年記念総会を帝国ホテルにて開催。
「60周年記念冊子－私の北新地物語－」を発行。

あとがき

北新地社交料飲協会 副理事長
60周年大会実行委員長
藤田 一彦

２０２０年の初頭から新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、とりわけ飲食業をはじめとした飲食店や観光業等のお店には、休業や時短営業の自粛要請が頻繁に起こり、現在に至るまで多大なる犠牲を余儀なくされました。このようななか、北新地社交料飲協会60周年の記念冊子発行にあたり、多くの皆様方にご協力をいただき、誠にありがとうございました。与代目桂春團治師匠、四代目中村鴈治郎氏の「スペシャルインタビュー」、毎日放送・上泉雄一アナウンサーの〝北新地賛歌〟、オーナーママさん達の「北新地の思い出」など、皆様の北新地に寄せられた〝熱い想い〟に触れ、協会員の一人として、北新地に課せられた期待と役割の大きさに身の引き締まる思いを覚えた次第です。

また、以前好評を博した「ホステス心得帖」を新たに作成し、今回の記念冊子に掲載させていただきました。この記念冊子を通して北新地の長い歴史とおもてなしの心が、末代までも継承されていくきっかけになれば幸いかと存じます。

あらためて、この記念冊子発行にあたり、皆様の多大なご支援・ご協力を賜りましたことを心より感謝申し上げるとともに、皆様の更なるご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

60周年記念冊子－私の北新地物語－

発　行　日　令和４年６月14日
発　行　人　長瀧 敏郎（北新地社交料飲協会 理事長）
監　　修　藤田 一彦（北新地社交料飲協会 副理事長）
編　　集　織田 高央（北新地社交料飲協会 副理事長）
校　　閲　60周年大会実行委員会
制作・印刷　株式会社 創美

北新地社交料飲協会
大阪市北区堂島１丁目２－２ 堂栄ビル本館３Ｆ
ＴＥＬ０６－６３４５－０００６

北新地社交料飲協会（ＫＲＫ）
ホームページはこちらから
https://www.kita-shinchi.org

非売品（禁無断転載）

KRK

北新地

北新地社交料飲協会
https://www.kita-shinchi.org